



僕が経験したこと

福井県立武生東高等学校 1年 川端 樹

夏季研修でカンボジアに行くという話を聞いたとき、「面白そう、行ってみたい!」と思いました。カンボジアのことは発展途上国であるということ以外全く知りませんでした。

日本と違うことだらけでした。冷蔵庫が普及されておらず市場に行くにしても生臭い強烈なおいがしたこと、お風呂に入るとき井戸の水をバケツですくってかぶったこと、食事をするとき虫がたかっていたこと。自分にとって当たり前ではない光景を目にしたり、体験をするたびに僕は衝撃を受けました。

研修の中で孤児院の子供たちと生活を共にする機会がありました。その孤児院を運営している岩田さんという方から一人ずつ子供たちの紹介がありました。生まれてすぐに両親から捨てられた子、幼い時に両親を亡くした子、虐待を受け親から逃げるようにしてここへ来た子、様々な事情を抱えた子供たちがいるということが分かりました。

子供たちはすぐに僕のもとに駆けつけ、遊ぼうと声をかけてきました。かけっこやサッカー、折り紙、目いっぱい遊びました。そこに言葉は必要ありませんでした。言葉以上のものが自然と僕たちをつなげてくれたからです。子供たちはあまりいろんな球技を知りませんでした。「なぜだろう」と疑問に思いつつも僕はバレーを教えました。初めて知る遊び、子供たちは目を光らせながら底なしの笑顔で遊んでくれました。

ある日岩田さんからのお話を聞く機会がありました。「カンボジアという国は非常に教育が遅れており、皆さんが当たり前と思っていることさえも分からない子供たちが多い」ということ、そして「自分は、小さい時から発展途上国で子供たちのサポートをする人になることが夢であり、今こうして孤児院でたくさんの子供たちの面倒を見ることが幸せであり自分の生きがいである」とおっしゃっていました。教育を受けられる有難さ、意味を考えさせられました。

「支援ってなんだろう」飛行機の中で、孤児院の子供たちの笑顔や岩田さんの言葉、カンボジアで見た人々の暮らし、いろんなことが頭の中でフラッシュバックし自然とこんなことを感じていました。発展途上国の人は支援を必要としているのだ、人々の暮らしを目の当たりにすればどんな支援が必要なのかははっきりと分かるものだと思っていました。けれど実際カンボジアの人々は幸せそうでした。子供たちのほとんどが靴を履いていない、初め見たときは「かわいそう」と思っていたのですが、それが彼らにとって当たり前のことなのです。インフラが整備されていない、冷蔵庫が普及されていない、生活環境が整っていない、僕がはじめのころに受けた衝撃もすべて当たり前のことなのです。孤児院での別れの時です、僕は子供たちへの支援の意味も込めて日本からいらなくなった洋服や、靴、文房具などを持ってきて子供たちにあげようとしていました。けれど、子供たちはそれらを受け取ろうとしてくれません。すると、子供たちは自分たちが今まで大切にしていた指輪やブレスレットを僕にくれたのです。彼らには彼らのプライドがあるのだと思いました。自分では満足していた支援だと思っていたのは本当にただの満足以外に過ぎなかったのです。むしろ、それは彼らのプライドを邪魔していたかもしれません。

自分がやるべき本当の支援というのは実際に国へ行って現実と向き合うこと。何をすれば良いか具体的に分からない自分にとって今後できる支援の一つの形であると思います。

今後僕はカンボジアのような国の子供たちに何かを伝えていけるボランティアをしたいです。それがただの自己満足にならないよう発展途上国の本質的な部分に目を向け、子供たちに夢を与えられる人になります。